名古屋柳城短期大学

ちゃぺるにゅーす

第8号

2003年12月17日

クリスマスによせて

本学学長　田浦武雄

クリスマスはイエス・キリストの降誕を祝う祭日です。英語では「キリストのミサ」を意味します。聖書にはイエス・キリストの誕生の月日は記されていませんが、４世紀頃にヨーロッパの教会で、12月25日を降誕祭として祝うようになったようです。４世紀頃のローマではミトラス教がローマ暦で冬至に当たる12月25日を太陽神の誕生日としていましたが、教会でキリストこそ真の正義の太陽であるとの考えから、この日を主の降誕の日として祝うようになったようです。なお、クリスマスに関してはＪ・Ｓ・バッハの「クリスマス・オラトリオ」(1734年)を始め多くの名曲があり、多くのクリスマス・キャロルが歌いつがれてきました。

クリスマスは、日本ではキリスト教会を中心に祝われ、信徒の家庭でも祝われています。日本のようにキリスト教徒が、人口の1.5%にすぎない国でも、12月ともなるとデパートなどでは、クリスマス・ツリーを飾り、クリスマス・セールなどが賑やかに行われています。戦前のような国家主義の下で、キリスト教が厳しく弾圧された時代と比べて、街の風景は大きく変わったように見えますが、それらはクリスマスを利用した商業上の利益をあげるための、年末の祭りの一つに過ぎないようにも思われます。

イエス・キリストの誕生については、四つの福音書のうちで、「マタイによる福音書」と「ルカによる福音書」との二つの福音書がとりあげています。これらの福音書の記事の中で、主が飼い葉桶の中で生まれたということは、何を意味し何を啓示しているでしょうか。主は恵まれた宮殿の中ではなく、貧困と排斥との中で生まれたのです。主は貧しい人の友であり、自己を絶対化し他者には無関心に陥りがちな人間存在のあり方を克服すべきであることを示しています。

これらの福音書より以前の紀元60年代に書かれた「マルコによる福音書」は、イエス・キリストの誕生については全くふれていません。またこれらより後に書かれた「ヨハネによる福音書」は、「言は肉となって、わたしたちのうちに宿られた」(１章14節)として、ロゴス論を展開しています。言は、ギリシア語のロゴスの訳語で、もともと世界の法則性を意味しますが、「ヨハネによる福音書」は、ロゴスとは神と人とを媒介し、神と人との間の仲保者としての神の子キリストを意味するものとしたのであり、言が肉となったと言うことはイエス・キリストが歴史的存在としての人となったことを説いたのです。

クリスマスは平和の主が私たちの中にこられ、共におられることを感謝する、信仰的に意義のある日であります。イエス・キリストは、私たち人間に、愛をもって仕える生き方を示し、人間としての悲惨を味わい、人間としての苦楽を共にし、人間の罪のために十字架の死をとげられましたが、それで終わることなく、復活の出来事をとおして、神の偉大な力が人間の罪的行為に絶対的に勝利したことを示されました。クリスマスは、私たちの救い主イエス・キリストの誕生を祝う日であるとともに、私たちの信仰のあり方を問う日でもあり、イエスが共におられることを知ることによって、存在への勇気を与えられていることを自覚すべき日でもあります。

クリスマスのごちそう
クリスマス特集

クリスマスは、学長先生の巻頭言にもある通り、世界的に有名な楽しいお祭りです。もちろんキリスト教にとって信仰的にも大切な行事です。ここでは、少し視点を変えて、「食」からクリスマスについて考えたいと思います。もちろんクリスマスの食事は、世界各地に星の数ほど種類があります。ここではレシピや味などは説明できませんが、代表的な国々から、特にクリスマスのお菓子を中心にご紹介しましょう。

まずは、私たちの日本です。日本のキリスト教徒人口は極僅かですが、クリスマスという行事は、昭和の始めから第二次世界大戦後にかけて急速に広まりました。日本ではその名の通りクリスマスケーキ（Kurisumasu Keiki）が有名です。スポンジケーキを生クリームで包み、イチゴを乗せ、ヒイラギの造花やチョコレート細工の小屋を飾る。誕生日にも使えるので汎用ケーキとも言えるあのケーキです。子どもの頃は、もっと大きく切ってとか、イチゴを二つ入れてとか子どもにとって悩み多きあのケーキです。

もっとも、切ってお皿に盛り付けてしまうと、単なるイチゴのショートケーキになってしまうのですが、クリスマスというコンテクストと雰囲気が、特別な対象として魅せていたのでしょう。このケーキは、外国？のものではなく、純粋に日本製です。外国？に行ってもありません。第二次世界大戦前の日本で考案された日本独自のものです。1960年～70年台頃は、日持ちを良くする為に、バタークリームで作られていたようです。その頃はきっと真っ白ではなかったのでしょう。日本の高度成長期以降、流通網（東名高速や新幹線などが有名です）が発達し、また冷凍技術（お店は勿論のこと、お家にもケーキが入るような大きい電気式冷蔵庫が来るようになる）の発達によって、今では生クリームを使用したものがほとんどになり、バリエーションも豊富です。その意味では、バタークリームの味を思い出す人は、人生の大先輩と言うことになります。もっとも家庭でクリスマスケーキをちゃんと作っていた場合は、この限りではありません。

次はグレートブリテンおよび北部アイルランド連合王国です。通称イギリスです。イギリスにはクリスマスプディング(Christmas Pudding)があります。プディングとはプリンと言ってもいいのですが、おじゃる丸が好きなあのプリンは、フランス生まれです。それを想像してクリスマスプディングを見ると、何か騙されたような気になってしまいますので、固定観念を捨てましょう。ディケンズの『クリスマス・キャロル』にも出てくる代表的なごちそうです。もともとはパン等を使ったおかゆ状（パンがゆ状）だったものと言われています。イギリスのどの地方のどの家にも代々伝わった独特の作り方があり、その家の主婦が作る時、家族全員が順番に願い事を密かに唱えながら材料を混ぜたりするそうです。そのまた混ぜ方は時計の針の回る向きで混ぜて行き(意外と近代的です)、これは宇宙の中心が地球であり、地球の周りを太陽が回ると信じられていたことの名残だそうです（いわゆる天動説です。ちょっと前近代的です)。現在のイギリス国内では2500万個が家庭で作られ、1500万個がホテルやレストランなどのお店で作られていると言われています（どうやって数えたのか不明ですが)。材料などは色々ですが、クリスマス用として一般的だと思われるものは、ドライフルーツなどを入れ蒸し焼きにして、出来上がりにブ

ランデーを上からかけ、火をつけて燃える炎を楽しんでから食べるというお洒落な食べ方をするそうです。またひいらぎの枝と実を飾りつけるようですが、それらはキリストの茨の冠を忘れないために、子どもたちに対するキリスト教的視覚教育の道具として用いられるようです。文字通りに飴と鞭のような方法です。またプディングの中に小さな飾りやコインを入れる場合もあるそうです。各家庭それぞれの味という意味では日本のお雑煮に似ているかもしれません。

次はイタリアです。食文化の盛んなイタリアでクリスマスのお菓子・ごちそうはと言えば、パネットーネ（Panettone）です。もともとはミラノが元祖らしいのですが、現在ではイタリア全土で作られています。卵をいっぱい入れたパン生地に、ドライフルーツなど様々な物を混ぜ、パネットーネ種というイースト菌で発酵させて焼くという、パンとケーキを足して二で割ったようなものです。こちらはパネットーネ種の扱いが困難で専門知識と技術が必要なため、また焼き上げてから逆さにして冷ましたりする工程があるため、お家ではあまり作られないようです。クリスマスのシーズンは、お菓子屋さんに様々に飾り付けられたパネットーネが並ぶと言うことです。もっとも期間限定商品ではなく一年中作られているようです

次はドイツとオーストリアです。ドイツではシュトーレン（Stollen)がよく食べられるクリスマスのお菓子です。クリスマス前のアドベントの頃から作り、

ゆっくりと時間をかけて熟成させるお菓子です。生地の中にナッツやドライフルーツ（主にピール・果実皮の砂糖漬け、レーズン)を混ぜ、焼きあがってから日増しに味が熟成されおいしくなるそうです。最後には粉砂糖をふりかけ、白い雪山のように見えるお菓子ですが、シュトーレンとは、ドイツ語で「坑道」

（トンネル）を意味します。雪山を切った断面に見えるところからその名前が付いたとも言われますが、その形がキリストの揺り篭を示しているとも言われています。

次に、世界三大料理の一つフランスです。ちなみに残り二つは中国料理とトルコ料理とするのが一般的のようです。フランスでは、ブッシュ・ド・ノエル（Bûche De Noël）が代表的です。パリの菓子職人の手によって1870年以降、クリスマスの時期に作られるようになった薪型のケーキです。スポンジ生地に好みでマロン味、プラリネ味、チョコレート味等のクリームを塗って、ロールケーキを作り、表面が木の皮に見えるようにヘーゼルナッツやアーモンドなどの茶色系のクリームを塗り、丸太の形をしたフランスのクリスマスケーキ。クリームがかなり複雑で凝っていて、さすがフランスという感じです。ブッシュは薪、ノエルはクリスマスの意味です。この薪とは、「ユールログ」（クリスマスの薪）のことを指します。

クリスマスの深夜ミサ（主の降誕を祝うために、だいたいは24日深夜から25日まで足掛け二日で行なう礼拝）が始まる少し前に、一抱えもある巨大な薪を暖炉にくべ、これを顕現日（１月６日）までの12日間、消えないように燃やし続け「生まれたばかりの幼子イエスが凍えないため」の風習と言われているものです。もっともキリスト教が伝わる前から越冬のためにこの風習があったとも言われています。メレンゲをマッシュルームの形に似せて焼いて乗せる場合もあります。それはマッシュルームの強い繁殖力から子孫繁栄を象徴した飾りとも言われています。

最後に、日本ではあまり食べられる料理で

はありませんが、クリスマスと言うとよく出て来る有名な料理、七面鳥の丸焼きです。アメリカでは人口の90パーセントが七面鳥を食べる時期があると言われますが、それはクリスマスではなく、収穫感謝祭です。勿論、クリスマスの時期にも食べるようですが、アメリカでは11月の第４木曜日に感謝祭（Thanksgiving Day）を行ないます。元来は

飢えに苦しむ移民に食べ物を分けてくれたネイティブアメリカンたちへの感謝ですが、現在では、収穫感謝・神への感謝と変わっています。ちなみに、カナダの感謝祭は、10月の第２月曜日です。七面鳥をクリスマスの時期に食べる習慣の発祥の地はイギリスとも言われています。1620年に清教徒を乗せた「メイフラワー号」がイギリスのプリマスからアメリカに向かう約一世紀前に、アメリカ大陸からイギリスに伝わったとされています。ヨーロッパでは、猪などの他、ガチョウやクジャクなど大型の鳥の丸焼きを食べていたので受け入れやすかったのでしょう。世界的に七面鳥が有名になったのは、二〇世紀に入ってからのアメリカの影響が大きいかもしれません。戦後の貧しい日本人にとって七面鳥の丸焼きは豊かさの象徴のように見えたと思います。しかし、実際に食べると、焼き鳥の方がいいと思う人も少なくないでしょう。

さて、クリスマスのお菓子や料理の極々一部を見てきましたが、共通していることは、普段とは違う贅沢なものとういことです。年に一度、家族と一緒にゆっくりと時を過ごし、一日だけ贅沢な料理を食べる。クリスマスのお菓子も料理も、そういう暖かさや安らぎや平和な時であるクリスマスを迎えるための、大切なツールなのです。今年こそ、世界中で一日だけでも平和な時・クリスマスが迎えられればと願います。私も、この原稿を手伝ってくれた愛する妻の料理で、娘二人と共にクリスマスを祝いたいと思います。

菅原裕治（本学・教員チャプレン）

川原啓美先生のお話
「共に生きる」

私は名古屋大学医学部を卒業以来、この地域で医療をしてきました。専門は胸部外科です。ここ４年間は老人保健施設愛泉館の施設長をしています。

1980年以来私はアジア保健研修所をやっています。それは発展途上国の貧しい人々の健康を守るために働く人を、一人でも多く育てる研修事業です。それは、私の外科医としての仕事と違った仕事です。どうしてそういう仕事をするようになったかということも、今日のテーマである「共に生きる」ということを心に見定めたことと深い関わりがありますので、それを話したいと思います。

私は、学生のころから途上国の人々のために医療をしようという気持ちをもっていました。

太平洋戦争の時、私自身は学生でしたので直接アジアの国に行きませんでしたが、私のすこし前の先輩、特にキリスト教の信仰を持った先輩たちが戦争から帰ってきて、「今は日本の人のために働かなければならないが、少し余裕ができたらアジアの人々のために働くべきである。また、アジアの国々は日本と米・英等と戦った時、戦場となりました。アジアの人々は、この戦争のため迷惑をこうむった。これに対して日本は責任がある。自分は戦争中日本の軍医としてアジアにいったが、これからはアジアの人々に対して平和の使徒として働きたい」と言われました。それを聞いて自分も将来そういう働きをしたいと思いました。

海外への医療奉仕の希望は、1960年にひとつの実を結びました。日本キリスト教海外医療協力会（ＮＧＯの始まり）ができました。その働きは、アジアの途上国に医師と看護師を送って医療のお手伝いをするという活動であります。私は当時専門の仕事などをしなくてはならなかったので、参加が大分おそくなりました。1976年にネパール王国に３ヶ月間、外科医として働きました。３ヶ月行って、自分もこれならやれると思い、ネパールの人たちも私を受けいれるなら、３～５年働きたい

と思いました。ネパールでの働きと現在の働きとを含めて、以下、スライドを用いて話していきたいと思います。

ネパールでの医療協力

ネパールは、ヒマラヤ山麓にある国です。タンセンという町の病院に行きましたが、この病院で私は３ヶ月間働きました。この病院は、100床位の病院で、外国の援助によって建てられました。働いているドクターは、全部外国人でアメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド等からきていました。アジアからは私一人でした。その病院では、手術をする外科医は私一人でありました。看護師さんが手術を手伝ってくれました。この町には電話もなく、新聞もろくろくないところでありましたが、手術をする病院だというので口コミで患者が増えてきました。患者の状態は様々でした。

そこでは、多くの出会いがありましたが、一つだけ印象的な例を話したいと思います。それは右の足に手遅れの皮膚がんをもった女性との出会いでありました。この人は２年位前に出来たがんをもちながら、病院に行けず出血して働けず、貧血があり栄養が悪い26歳の女性でありました。がんはすでに骨に浸潤していました。私は、あなたが命を保つには、右脚を高いところから切断しなくてはならないことを告げました。彼女は「私の足を切断してもらっては困る。上の子はまだ６歳で子どもは皆小さいので、私は一家を支えるため２本の足であくまで働きたい。」と言いました。そこで私は足を切らなければあなたの命が危ないことを説明しました。すると彼女はしばらく考えたあとで次のように言いました。「足を切らなければ私が死ぬことは悲しいことだが仕方がない。それは一つの解決になるかもしれない。私が死ねば、夫は次の奥さんをもらえる。その人が子どもを育て、夫を助けることができる。私が足を切って寝ていたら、わが家は全滅してしまう。だから足を切断できない。」と言いました。しかたなく、私は暫定的に傷のところを切り取り骨を少し削って、皮膚を縫って手術を終えました。２週間位してこの人は帰っていきましたが、医学的常識からすれば半年はもたないと思われました。私はこの人と出会い、良いことをしてあげられなかった無力感におそわれました。それまで私は手術をネパールの人にしてあげて、いい気持ちになっていました。ネパールより200倍の金持ちの国の日本から来て、医療の技術をふるって気の毒なネパールの人を助けてあげているという意識がありました。しかしこの患者は偉い人だと思いました。聖書に「友のために命をすてること、これ以上に大きな愛はない」（ヨハネによる福音書15:13）と教えられています。この女性は死ぬまで家族のために働くと言っています。この患者から大きなショックを受けました。そこで私はネパールをもっと知るために田舎の人たちはどういう生活をしているかを知りたいと思って行ってみました。

ある日私は、地域の保健師たちとある村に行ってみました。そこでは朝早く、女の人たちが、谷に降りて水を汲み、水を入れたかごをしょって、上のほうの家までかつぎあげていました。その水で生活をするのです。炊事をし、さらに育児をし、夫と一緒に働いたりしていました。私は足を切っても皮膚がんの患者も松葉杖をついてやれると思っていたが厳しい労働では、松葉杖をついてでは、このような坂をとても登ることは出来ないと感じました。ヒマラヤのきれいな山々をみることはできても、女性たちの労働は非常に厳しいことを感じました。

ある村に入った保健師が子どもの体重を計ってみましたが、体重が増えていないことがわかりました。親は忙しくて、子どもが食べているかどうかを知っていないのです。そこで保健師さんは、時間を決めて、穀類と豆類と野菜を混ぜて、ちゃんと食べるようにやさしく、丁寧に指導していました。こういう仕事は、大切な仕事だと思いました。

３ヶ月たってネパールを去るときがきました。自分はまた来てネパールの人たちのために働こうと思いました。ネパールの人たちは純朴で良い人たちで、一緒に働いたスタッフも、私にまた来て、永く働いてくれと言い、患者さんたちもまた来てくれと言ってくれました。しかし、ここは交通の便が悪く、病院に来られる人は限られており、手術を受けられる人は限られており、20％の人しか病院に

来られない状態でありました。私はネパールの人々全体に対して、どうしたらよいか、いろいろと考え迷いました。

1978年に、WHO、ユニセフが合同で、世界保健会議を開き、プライマリ・ヘルスケアという、新しい考えを出しました。これはアルマ・アタ宣言と言われています。それによると保健戦略を改革するものでありました。治療をすることから、病気を予防する地域保健へ、都会中心の医療から田舎の人たちが自分の健康を守る地域中心へと戦略を考え、2000年までに「全ての人に健康を」というスローガンがうちたてられました。そこで私は考えました。自分が出かけて働いても特定の場所での働きしかできない。途上国で働くワーカーを一人でも多く育てよう。それがアジア保健研修所を始めるきっかけになったのです。

アジア保健研修所愛知国際病院の建設

次に愛知国際病院の建設の話に移ります。1979年に日進町米野木の愛知牧場の経営者の厚意で、土地を分けていただき、多くの人々の助けがあって、1982年に、アジア保健研修所と愛知国際病院を建てました。次いで老人保健施設「愛泉館」を建て、1999年にL字型のホスピス病棟を建てました。

愛知国際病院の入口にモットーを掲げました。そのことばは「God Heals We Serve」（神癒し我ら仕える）という標語です。このことばは、私の経験から考えたものであります。40歳代の後半になって気づいた時、病気が治るのはその人の生命力であり、治療してやるのは私たちでなく、生命力をたかめるのは神であること、医師は治療してやるのではなく、神が治してくださるのであり、私たちはその道具にすぎないことを、はっきりさせておこうと思い、この銘盤をつくりました。

また愛知国際病院の理念をさらにより具体的に考えて、次の３つにまとめました。

1）キリスト教精神に基づく全人的医療
2）アジアの人々に深い関心を持ち、その増進に努める
3）地域と共に地域に支えられた医療

これらのうち３）のことばに関連して次のことを想い出します。

私がアメリカの大学病院で勉強している時、その病院にはボランティアの人たちが多くいました。ある日、出会った一人の少女が「自分はこの病院で生まれた。大きくなったらこの病院のナースになる」と言いました。地域の人たちは、Our Hospitalと言って地域の病院を大切に思っています。日本でもこのような意識をもち地域の人とともに歩く必要があると思います。

先に全人的医療を重視していると言いましたが、WHOの憲章の中に、健康の意味が適切に述べられています。それによると、健康とは、身体的、精神的、社会的、霊的〔2000年から霊的（スピリチュアル）が加わった〕、これらが完全に良好な状態であり、単に病気がないということではない、と述べられています。人を癒す、保健、介護等のさいにこれら４つのものを総合したものが全人的医療であります。

次に、世界で最初の病院をたてたのは、フアビオラという４世紀のイタリアの女性でありました。かの女は信仰深く、病気になった人をつれてきて、暖かく看病したことから病院は始まっています。

中世の病院では、世話をしているのは修道女たちであり、僧医による治療が行われていました。病院はもともと疲れた人、弱い人をもてなすところが出発点といえます。

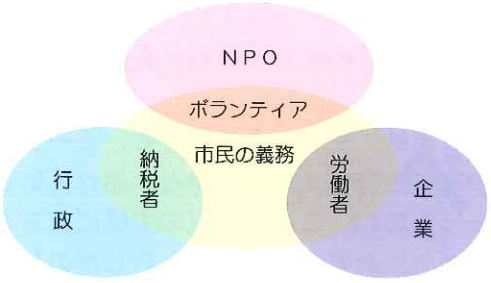
次に、ホスピスとはラテン語のHospesからきています。これは客をもてなす主人と客との両方を意味します。またHospitalは巡礼や旅行者を泊めることから来ていることばです。

1996年ころ、私は地域の人たちとホスピスを造る計画をたて、ボランティアグループの紫苑に属する60人位の人たちと一緒にやりました。ホスピス病棟を建てるさいには、病院らしくない建物にすることに配慮しました。

次にボランティアについて述べたいと思います。以前には市民は企業で働いて賃金をえて、税金を払うことでよかったのですが、近年ではＮＰＯへボランティアとして働くことも市民の仕事であると考えられてきました。アメリカは人口２億人のうち6000万人のボランティアがいますが、日本では数はまだ少ない状況です。

ＮＰＯ、企業、行政の関係を示すと下図の

ようになります。



近年音楽療法が評価されています。患者に適当な音楽をきいてもらったり患者に適した歌を歌ったりします。音楽療法によって鎮静剤がすくなくてすむ場合があります。

アメリカに留学していたとき、私は、途上国への医療協力の夢をもっていましたが、留学していてつらい時に、あるアンティークの額で次のことばをみて勇気づけられました。

The key to happiness is having dreams

幸せのかぎは夢をもつこと

The Key to success is making them come true

成功へのかぎはその夢を実現すること

このことばに注目したい。途上国の人たちと共にありたいという夢を多くの先輩や友人たちとともにあたためてきて、その夢を実現してきました。

これまでいくつものスライドをみていただきましたが、本日の「共にいきる」というテーマは大きな意味があると思います。20世紀は文化や科学が進み、医学も進んできました。しかし、20世紀の前半には大きな2回の世界大戦がくりかえされてきました。多くの人が20世紀後半も憎しみあい、殺しあうことが続いた世紀となりました。21世紀こそ、平和の世紀にしよう、皆で共に生きる世紀にしようと考えましたが、2001年9月11日のニューヨークでの国際テロをきっかけに憎悪と戦いが激しくなっています。

自分を中心にして、自分の正義を他へ押しつけることはまちがいだということを知ることが大切であります。

私がネパールに行って出会ったことで知ったのは、自分たちの考えを押しつけるのではなく、その人たちの伝統、歴史、文化を尊重することが大切であるということでありました。また、私は気の毒な人たちを助けにいってやると思っていたのに、むしろネパールで出会った人々から、キリスト者のあり方を教えてもらったと思います。

20世紀の前半、聖者といわれたアルベルト・シュバイツァーは医師としてアフリカで働きましたが、「アフリカの人の顔にイエスをみた」と言いました。私と同じ経験であると思いました。医療協力は、互いに助け学びあうと時に、平和に到達できると思います。皆さんは保育や介護に進まれるわけですが、人を幸せにすることで、自分も幸せになれることを発見することができ、自分の世界は広がることができます。私はこのことをこの15年位前になって分かってきました。私たちの生き方「共に生きる」ということが、とくに大切であります。

キリスト教Q＆A

名古屋聖ヨハネ教会
牧師補
執事　ヨハネ大和田康司

Q.「神さまって、どこにいるの？」

A. つい最近のことですが、教会の日曜学校で子どもたちに「神さまのことを思ってお祈りしましょう。」と言いましたら、一人の女の子が「神さまって、どこにいるの。」って聞いてきました。

その時、私がしどろもどろで何と答えたかはともかくとして、あなたならこの素直な疑問にどのように答えてあげますか。

神さまは、ぷかぷか浮いている雲の上にいらっしゃるのでしょうか。それとも空のもっと向こうの星の瞬く宇宙にいらっしゃるのでしょうか。

確かに「天におられる神よ」ともお祈りします。でも、それは神さまが空や宇宙にいらっしゃるということではありません。神さまが天におられるということは、神さまは人間の知恵でははるかに及ばないということを表しています。私たちの知恵では神さまを知ることはできません。でも、私たち一人一人は神さまに知っていただいています。神さまに知られている自分を知ることで、私たちは親しく「天におられる神よ」と呼びかけさせていただけるのです。

あなたに、私のほうから一つ質問させてください。あなたの心はどこにありますか。人にここにありますと見せられますか。見せられませんね。でも、あなたの心は確かにあるでしょ。どこにありますか。それはあなたの中にありますね。また、あなたのからだ全部にあるともいえますね。また、心は場所をとりません。

神さまについても同じことが言えます。神さまは私たち一人一人の中にいらっしゃるということができるし。この世界の全てのものの中にある、ということもできます。なぜなら、全てのものがあるようにしてくださったのは神さまだからです。そして人間の心と同じように神さまは場所をとりません。

見えないけれど確かにあるもの、それが神さまです。神さまは人間の目で見ることはできません。でも心の目で神さまを見ることができます。心の耳で神さまの声を聞くことができるのです。

神さまはいつも私たちのそばにいてくださって、私たちが話しかければ、いつでも一生懸命聞いてくださいます。ですから、お祈りをするということは神さまに話しかけることです。

小説家の三浦綾子さんが本（岩波書店『ひかりと愛といのち』）に書いている、本当にあったお話を紹介します。

「ロスアンゼルスのある教会に、ある中年の夫婦がいて、その夫婦には子どもがいなかった。子ども好きの夫婦は、何とか子どもを与えられるよう祈り続けてきた。ところが、結婚15年目に祈りがかなって、ようやく妊娠した。二人は狂喜した。赤児は無事に出産した。いや、出産はしたが、その赤児は重いハンディを負っていた。初めてその顔を見せられた夫は、顔面蒼白となった。夫はその子の顔を妻には見せたくなかった。が、看護婦（原文のまま）はその子の顔にガーゼを軽くかけ、待ちかねている妻のところに抱いていった。

夫はしおしおと、その後についていった。妻のショックと嘆きが目に見えるようだった。何も知らぬ妻は、看護婦が病室に入ると、声を上げて喜んだ。だが、看護婦がその顔のガーゼを取った途端、妻の顔は驚愕に硬直した。

妻はやがて目をそらし、壁のほうを見て何も言わなかった。長い沈黙が続いた後、ようやく妻は夫のほうを見て口を開いた。

『あなた、ごめんなさいね』妻はまず夫に詫びた。そして言った。

『神さまは、ずいぶん長いこと、この子をどこの家に生まれさせようかと、迷っていらっしゃったのね。この子をどの夫婦に育てさせようかと、お考えになっていらしたのね。そして、わたしたち夫婦をこの子の親に選んでくださったのね。神さまが育てなさいとおっしゃったこの子を、二人で大事に育てましょうね。』

この妻の言葉に、夫は激しく心を打たれた。」

あなたの心の目を開いて見てください。心の耳で聞いてください。神さまがどこにおいでになるか、わかるでしょ？

おしらせ

○本年名古屋柳城短期大学は、短大創立50周年を迎えることとなりました。それに伴い記念行事がありましたので、ご報告いたします。

10月29日(水)は、川原啓美先生を迎えて全学合同礼拝を執り行い、礼拝後に恒例の記念音楽会を開催いたしました。

11月１日(土)には創立記念礼拝を、カナダ聖公会からＦ・ホーキンス初代学長のご親戚にあたるダイアン・ディストラー聖職候補生を説教者として迎えて執り行いました。その後、八事霊園にて墓前礼拝、ラウンジ前にて森主教司式のもと柳の木の記念植樹式を同時に執り行いました。諸礼拝後、ラウンジにて、同窓会と共催で感謝の集いを開催し、教職員・同窓生の他、ディストラー先生も交え、柳城の歴史と伝統を改めて感じる時となりました。

２日(日)には、柳城祭の中で松澤哲郎先生を迎えて、記念講演会を開催いたしました。

2003年12月17日発行　第８号
発行所　名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町2-54
編集兼発行者　名古屋柳城短期大学 宗教委員会
印刷所　株式会社　丸和印刷

この印刷物は再生紙を使用しています。